

澁谷 鎮明*

Shizuaki SHIBUYA *



韓国における「白頭大幹」の評価と「脈」の論理

Evaluation of 'Baekdu-Daegan' and Logic of 'Maek' in Korea

1. はじめに

本研究は、現代韓国社会において、以前は「迷信」とされた風水地理思想が、どのように評価され受容されているかについて探究するものである。ここでは、その一環として、朝鮮半島の北部にある白頭山から半島南部の智異山に至る山の連なりを示す「白頭大幹」概念に代表される「脈」の論理と、その現代的評価について検討したい。

中国起源であり、朝鮮半島、ベトナム、沖縄等、東アジア全域に広く伝わった風水地理思想は、陰陽五行や「気」概念など東洋思想を基盤として、住居や墓の造営に良い場所や方位を探ろうとするものである。風水地理思想は、「迷信」として排斥されることもあるが、東アジアにおいて広く通用し体系化された伝統的地理思想であり、墓の造営などを通じて、人々の精神世界と深くかかわる側面を持っている。

東アジアに広がる風水地理思想は、「気」概念を主体としながら地形を見て「良い場所」を地形から判断する形勢学派と、陰陽五行説や易に依拠しながら「良い方位」を探る原理学派に大分される。本稿で扱う「白頭大幹」概念や、その背景にある「脈」の論理は、上述の形勢学派による地形判断の際に用いられてきた。このような形勢学派は、朝鮮半島において強い影響を及ぼしてきた。

韓国学中央研究院による web 版の「韓国民族文化大辞典」によれば、「白頭大幹」とは、

現在の中朝国境に位置する白頭山から半島南部に位置する智異山まで連なる朝鮮半島で最も大きい「山^{サン}チュルギ（山々の連なり）」であるとする。この背景には気の流れる「脈」に沿って山々の連なりが形成されるという形勢学派の風水と極めて近い考え方がある。同時にそのような論理を持って国土や地形を把握しようとする地理認識が見て取れる。

これまで韓国において、このような風水地理思想については、1980年代より地理学、建築学、歴史学を中心としながら学術的な研究が行われ始めた。当初は風水地理思想の論理そのものや実際の景観（住居や村落・都市等）への影響に関心がよせられ、盛んに研究が進められた。その後2000年代に入り、歴史時代の風水地理思想の運用と社会的背景や、風水の論理で形成・保全される「村の林」など、伝統的な環境整備手法について注目されるようになった。これは最近の、風水地理思想の「伝統的知識」としての役割への関心にもつながっている。

その中で筆者は、これまでこのような朝鮮半島の風水地理思想について、主として地理書や地誌、あるいは古地図にあらわれる地理認識への影響などを中心に追究してきた。他方近年、伝統的な地理思想である風水地理思想の現代社会における評価について関心を持つようにもなった。本稿はこの双方の関心に基礎を置くものであり、「白頭大幹」に代表される「脈」の論理を用いた山や地形の地理認識方法が、現代韓国社会でいかに評価されてきたのかについて探

*中部大学国際関係学部国際学科

究するものである。

このような視点は、筆者の専門分野である人文地理学における地理思想研究や、地理学史もしくは科学史的研究においても意義あるものと考えられる。特に隣国の伝統的地理思想のありようと、その現代的展開について探ることは地理学研究者の重要な課題になり得ると思われる。

なお本稿では、主にこのような評価の転機と思われる研究や政策、出版物を取り上げることで、そのおおよそのアウトラインを描き出すことを試みたい。

2. 韓国の風水地理思想にみる「脈」の論理による国土把握

前述のように本稿で扱う「白頭大幹」という発想は、上述のように基本的には朝鮮王朝期までに定着した風水地理思想、またそれに関連する地形環境認識の影響が背景にあると考えられる。その論理はどのようなものであるだろうか。

基本的には山々の連なりが、地中を流れる気の流れ「脈」によって形成されたとの考え方が基礎にあり、その考え方を軸に地形をとらえ、記述しようとする地理認識なのであるが、本章では、その論理について簡単に述べ、朝鮮時代の資料にみられる事例をあげて確認してゆきたい。

(1) 形勢学派の「脈」の論理

朝鮮半島に強い影響を与えた風水地理思想の形勢学派では、「気」に基づく地形判断がその主要内容であり、その判断は墓や居住地の立地占定など場所の評価に用いられた。この形勢学派の論理の中では、「気」の流れる「脈」に沿って山脈が形成されると考えられ、適切な「気」が供給される場所が「吉地」とされる。この「気」と「脈」の論理は形勢学派の最重要のポイントであるともいえる。

その具体的な論理は、山をひとつながりの

「脈」ととらえ、そこを気が流れており、その地中を流れる気の強弱などの状態によって山々が形を成すという考え方である。朝鮮半島においては半島北端にある名山、白頭山から半島各地の山々に脈がつながり、その脈を伝わって生氣（精気＝良い気）が供給されるとも考えられていた。

この「脈」の概念について確認しておきたい。図1は、気・脈と山の関係を示したものである。図1中のAのように、形勢学派の考え方においては、地中を地気（生氣）が流れているものと考えられている。その流れに従って、Bに示すように山が形をなして連なると考えられるのである。このような山々の連なりを形勢学派の風水では山々の連なりがうねって連なる姿を龍になぞらえて「龍脈」とも呼ぶ。また場所によって気の強いところ、弱いところ、あるいは止まっているところがあるとも認識され、その気の強弱や属性によって地表面の山の形が規定される。例えば図1中Cに示すように、気の強いところには高い山ができ、図1中Aのイのように

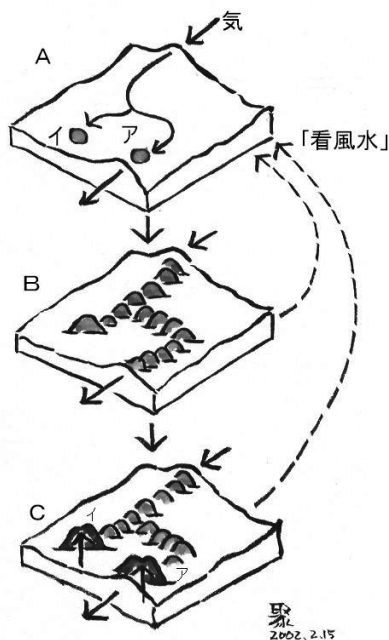


図1 「気」「脈」と龍脈の関係

鮮山脈の頂点となった（精氣如走千里・・・後抽一脈為朝鮮山脉之首）」とあり、この時期にはすでに「精氣」が山の「脈」の形成と関連していること、それが中国から朝鮮半島に連なっているという地理認識が見て取れる。

朝鮮半島の脊梁山脈が半島東側に寄っており、半島北部の白頭山で中国側と連なっていることは、高麗後期の『編年通録』の記述などに「水母木幹」（図3）と記されることなどを見ても、早い時期に認識されていたものと思われる。

このような半島全体の山に関する認識だけではなく、半島各地の地勢に関しても「脈」や「精氣」などの語を用いながら説明されている。例えば「八道総論」の「京畿」の項では、漢陽（ソウル）近くの白岳山周辺の山々について「・・・ここから延びる一本の支脈は西南に進み、他の一脈は南に進み白岳山となった。形家（形勢学派の風水家）によれば天を突き抜く木星の形局

であり、宮城の主山である。（・・・一枝西南去為白岳。形家言衝天木星為宮城主。）」と「脈」である山の連なりを追いかけるように叙述し、風水家の見解や、風水用語をおり交ぜながら山の形態なども示している。

朝鮮時代に地域ごとの情報を集めた邑誌にもこのような山の認識は表れる。現在の韓国東南部に位置する慶尚道清道郡の邑誌（1871年）には、この認識に基づいた表現で郡の領域全体の山々を詳細に記述している。邑誌では通常山や河川などの自然環境について「山川」の項で示されるのが一般的であるが、『清道郡誌』では、前文に長く示される。図4は、朝鮮時代の古地図である「大東輿地図」に『清道郡誌』に示された山の連なりを示したものである。

『清道郡誌』には、「断石山の大きな山の連なりの一枝が西に向かい、うねりながら百里余り進み鰲邑（清道邑）に至る（・・・蓋以断石山大幹龍之一枝西出逶迤横亘百有余里至于鰲邑）」と述べられ、以下「脈」に見立てた稜線の山や峠を、まず図4中のAの稜線をたどりながら詳細に記す。その後Bに該当する鳥禮山までの稜線を示したのちに、再度断石山に戻り、「断石山の一支脈が慶州義谷駅後方の山を過ぎ険しく聳え立って雲門山となる（断石山一枝過慶州義谷驛後嶺嶙峋起伏層疊峻極為雲門山）」と、C



図3 「水母木幹」による国土把握（崔昌祚、1997）



図4 『清道郡誌』で示される「脈」の連なり（京城帝大版「大東輿地図」に筆者加筆）（韓国学文献研究所編『邑誌 二〇慶尚道④、1987』）

にあたる稜線を説明する。

このような朝鮮時代に作成された邑誌には、地中を流れる「気」による「脈」によって、山々の連なりを記述するという方法が取られるケースも多い。

また邑誌に付属しており、邑地図あるいは郡縣地図などと呼ばれる古地図にもこのような認識が表れることがある。図5は朝鮮半島東南部に位置する慶尚道永川郡を描いた「永川郡之地図」であるが、図中Aの母子山からBにあたる永川の行政拠点である邑治までは、一直線に山々が連なっていることが示されている。

郡縣地図のような地域を描く古地図だけではなく、朝鮮全図やより著名な全国地図にもこのような認識は用いられている。朝鮮時代の代表的な朝鮮全図を、李燦編『韓国の古地図』（1991）

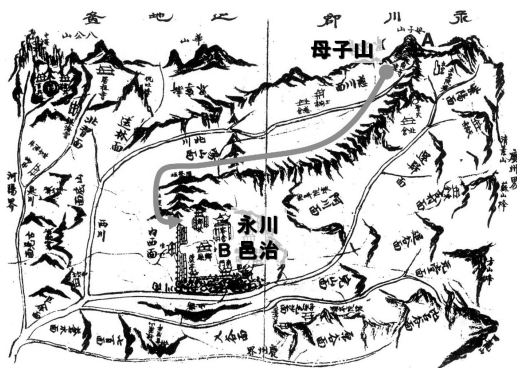


図5 「永川郡之地図」に見る「脈」の表現（韓国学文献研究所編『邑誌 二〇慶尚道④、1987』）



図6 「朝鮮八道古今総覧図」太白山附近（1673年。李燦『韓国の古地図』、1991、汎友社所載）（山々が単独で描かれている）

や嶺南大学校博物館『韓国の古い地図』（1998）などの地図集で概観すると、およそ18世紀前半までには、それまで単体で描かれていた山々（図6）が、連続して線状に描かれるようになった（図7）ように見える。その後に1861年に金正浩によって作製された木版印刷の朝鮮全図「大東輿地図」では、ちょうど唐草模様のように見える線状の山々の連なりが、地図の骨格になっており（図4参照）、脈の論理を用いた山々の認識があることが推察される。約16万分の1と比較的大縮尺の「大東輿地図」を金正浩が再編集し、コンパクトにした「大東輿地全図」には朝鮮全体の地理的条件に関する内容の序文が記されているが、の中には「崑崙一枝行大漠之南・・・」という、前述の『扞里志』と同様の内容が記されており、このような「脈」の論理が国土を認識する方法として定着していることが推察される。

(3) 『山経表』と「白頭大幹」

本稿で扱う「白頭大幹」概念は、基本的には朝鮮王朝英祖代（1724-1776）の、申景濬の著作とされる『山経表』に記されたものが代表的である。『山経表』は、半島北部の白頭山から半島各地への山々のつながりを詳細に示した文献である。図8は『山経表』の冒頭部分である。この書は、白頭山からの山々の連なりと各々の



図7 「海東八道烽火山岳地圖」太白山附近（17世紀後期。李燦『韓国の古地図』、1991、汎友社所載）（山々が線状につながられて描かれている）

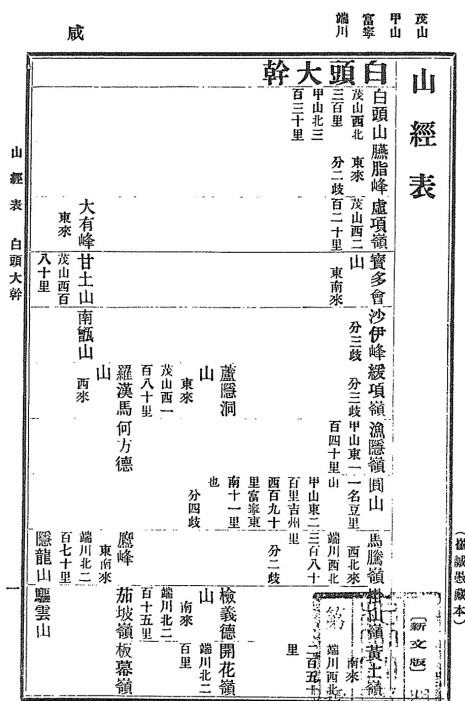


図8 『山経表』の表現

山の情報のみを詳細に示したものである。その内容をまとめたものが図9である。これを見ると山々の連なりを整理した上で、「大幹」「正幹」「正脈」にランク付けし、地名を冠して「白頭大幹」「長白正幹」「漢南正脈」のように命名している。『山経表』に直接の言及はないものの、「正脈」等の表現から、山の連なりを、「気」の流れる脈としてとらえる「脈」の論理が見て取れる。

この『山経表』にみられる山々の記載方法は、図8に示すようなものであるが、これは、一族の家系を示す族譜の記載方法にも酷似している。族譜の記述スタイルは、ある意味では単一の祖先から子孫が樹状図状に分かれ行く様子が示されるものであるので、そのような方式で国土の山々が認識されているとも言えるだろう。管見の限り、国土の山々をこのようなスタイルで認識するというのは世界的にも珍しいものと思われる。

この中で「白頭大幹」は、およそ朝鮮半島



図9 『山経表』に示された山々の連なり

の脊梁山脈にあたる部分を指し、いわば最もレベルの高い「脈」として評価されていると言える。「白頭大幹」は、現在の中朝国境の白頭山より南下して咸鏡道の頭流山で長白正幹と分かれ、半島東部の脊梁にあたる部分で金剛山を通過し、太白山、小白山付近で内陸に入り、俗離山を経て半島南部の智異山に至る山の連なりを示す(図9参照)。なお、『山経表』に示される「白頭大幹」を含む「脈」は、実際のところ山の連なりを示すので、上述の地理書や地誌の例と同様である。またこれは、分水界や集水圏を把握する「尾根線」に近いものである。

3. 現代韓国社会における「白頭大幹」と「脈」概念の再評価

「白頭大幹」に代表される、山々の連なりを「脈」としてとらえる方法は、1990年代に『山経表』が復刻されたことで再評価され、注目されるようになった。日本統治期に導入された地質構造に基づいた「山脈」概念とは異なる、独

自の地形、あるいは国土把握の方法として評価されたのである。本章では、このような点について、管見の限りの資料を参照しながら、学術研究も含めた現代韓国社会における評価について追究したい。

（1）韓国における「脈」概念に関する学術的研究の動向

冒頭に、韓国における風水地理思想の学術的研究が1980年代から開始されたことを述べたが、当時は、それまで迷信として批判的な視線を向けられていた風水地理思想が、そもそものような内容であるか、その全体像を示そうとする研究が多かった。この中で地理学者の崔昌祚による『韓国の風水思想』（原著1984年）は、現代韓国の風水地理思想に関する学術研究における先駆的な成果である。

これを見ると、「風水説の原理」の章で、朝鮮半島で盛んに用いられた形勢学派の風水を用いて、「穴」や「明堂」と呼ばれるような「良い場所」を探る方法を、おおよそ6つのパートに分けて論じているが、ここまで述べたような、山の連なりと「気」や「脈」の関連性について述べられるのは、基本的に山の形態の良し悪しなどについて触れられる「看龍法」のパートである。そこでは風水書である『琢玉斧』や『撼龍經』などの記述を用いながら、中国の崑崙山を起源とする三つの龍脈のうち「北龍」の支流であり、それゆえに崑崙山が朝鮮半島の山々の起源であることが示される。しかしながらその後は風水術における山々の連なりである「龍」の良し悪しについての理論が示されている。これに代表されるように、前述の『山経表』に表れるような、国土全体の地理認識についての論及は、この時期の他の研究においてもあまり見られない。

筆者の管見の限りにおいて、韓国で「白頭大幹」に代表される「脈」や、それによる国土認

識についてクローズアップされたのは、『山経表』の復刻版の刊行ではないかと思われる。前述のように『山経表』は、申景濬によって著された地理書であるが、この復刻版は、崔南善などによる朝鮮光文会によって1913年に刊行された「朝鮮光文会本」をもとに1990年に復刻された。朝鮮光文会は、1910年に設立された、朝鮮の古文獻を復刻、頒布する団体であった。

この復刻版には、復刻版を刊行した朴龍洙による序文「山経表を再刊して」、解題「山経表の一研究：原典、刊行時期等書誌学的検討を中心に」、参考のためと思われる「大東輿地全図」も収められている。このうち朴龍洙の序文を見ると、『山経表』やそこにみられる地理認識への高い評価を見ることができる（朴龍洙、1990）。

序文では、「山経表は80年代中盤から一部では注目されてきた地理書である」とされ、「山経表の文献的価値は、何よりもこの書が民族固有の地理認識からはじまる山^{サン}チュルギ（山の連なり）の名称があったという事実をはっきりと活字を通じて初めて確認するところにある。」と述べている。

次いで、『山経表』に示される、その韓国（朝鮮）独自の地理認識への評価が述べられる。このことは「そして白頭大幹、長白正幹など、この書に表れる山の連なりの名称が、われわれが学び、信じて現在でも使用している太白山脈、小白山脈等の名称と異なっているという点でとても衝撃的であった」などの記述に良く表れている。

さらに「太白山脈」などのような山脈名が日本統治期に生じたものであることから、「今日われわれが理解している山脈の名前と構成は、一人の日本人学者によって作り上げられたもので、日本の植民地支配下で通用し、そこから解放されて半世紀近くなった今でもそのまま通用している」と述べた上で、「国土は一つの民族が生きてきて、今も生きており、今後も生

きていかねばならない民族生存の空間的場所である。そして国土は単純に地形、気候、土壌など物理的自然環境だけを意味するのではなく、代々生活して成してきたわれわれの民族文化が根付いている生の現場なのである」と、国土と「民族文化」について論じる。なお、「一人の日本人学者」というのは、朝鮮半島の地質構造を示した小藤文次郎のことを指している。

また「・・・同時にわれらは新たな責任を引き受けることになった。『山経表』の提示している山の連なりの名称、そしてその背景をなしていることが明らかな風水地理思想など、われわれ固有の地理認識と思想などを科学的で合理的に研究しなければならない時代的要求の前にいるのである」とし、これらの地理認識の「脈」概念などが風水地理思想との深い関わりのあることが示される。

一方で、「われわれのものだから、あるいは日本人が作ったから、というような排他的民族意識を抑制して妥当性と説得力を備えた時にだけ「創氏改名」された山の連なりの名称を探し出すことができる」という叙述からは、過剰な民族意識について戒めるとともに、一方でかつて日本人学者のつけた山脈名が本来のものではなく、「創氏改名」されたものという表現をしていることが理解される。

ところで、このような山々の連なりは、旧韓末には近代的な地理学の導入とともに名称や内容が変化していったものと思われる。例えば金料哲（2008）によれば、張志淵による朝鮮半島の近代的な地誌とされる『大韓新地誌』（1907）では、「地文地理（自然地理）」中に「山経」という項目があり、国土の山々や地形に関する情報が述べられ、それまで用いられていた「白頭大幹」もしくは「白頭正幹」という名称が、「白頭山脈」と表現されているという。「山経」という表現も『山経表』に示された山々の連なりと同義と思われ、この書は近代地理学導

入の転換点とも思われる。

このような「脈」や「白頭大幹」についての評価は、その後も引き継がれていく。例えば1997年に刊行されたチョ・ソクピルの『太白山脈はない』は、タイトルにやや民族主義的色彩がある書である。記述内容には、日本支配期に日本人が朝鮮半島の山々の「脈」を断ったことで人材が出ることを妨げたという「日帝断脈説」などにも触れられ、一見民族主義的に見える。しかしながら主たる内容は一般向けに『山経表』の内容を読み解くもので、特に一般には理解しにくいであろう「脈」の認識や、そこで示される尾根線（稜線）、それに囲まれてできる集水圏の解説（図10）などを平易に行なっている。山川が双方とも樹状図的に表現されることを「川は樹木だ」「山も樹木だ」と述べ、理解を助ける表現をしている。

このような内容からは、「白頭大幹」に代表される「脈」の論理とそれを用いた地理認識は

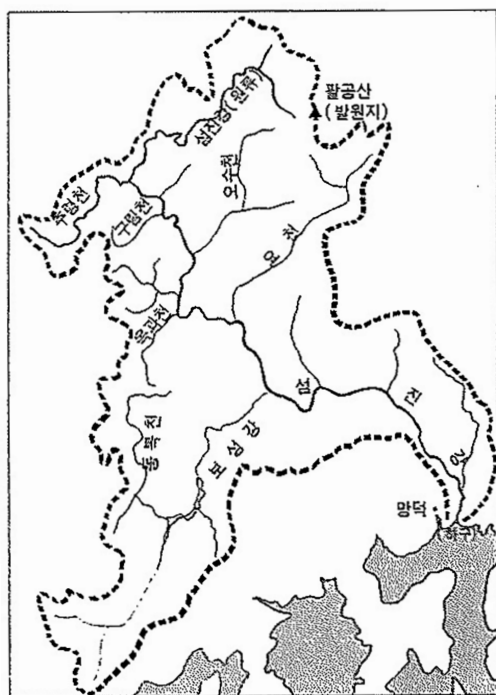


図10 『太白山脈はない』における「脈」と集水圏（チョ・ソクピル、1997）
（点線で示された「脈」に囲まれた内部が「集水圏（＝流域）」と解説される）

肯定的な評価がなされ、それがいわば「民族の地理」として引き継がれていることが理解される。他方でこのような評価が、過度に民族主義的になっていない印象を受ける。これは山や河川の認識方法という極めて物理的、現実的な内容があり、現在の地理学教育でも見られるような集水圏など、現在の「科学的」な環境認識とも合致する部分があるためかもしれない。

（2）現代韓国における「白頭大幹」および「脈」概念の評価と利用

ここまで述べてきた伝統的な地理認識に関する評価は、主として学術的研究においてこの後も継続したものと思われる。しかしこの「白頭大幹」という語は、現在の韓国において、学術界のみならず一般にもある程度認知された語となっているようである。恐らくその理由の一端は、2003年に韓国において、環境部と山林庁が主体となる、「白頭大幹保護に関する法律」が公布されたことであるだろう。何よりも法律に「白頭大幹」という語が用いられることで「公式化」、「現実化」した印象がある。

この法律の内容は、半島の脊梁山脈である「白頭大幹」とその周辺を保存し、無分別な開発を抑え、国土を健全に保存し快適な自然環境を造成し国土管理を行おうとするものである。またこの法律に基づいて環境部や山林庁が政策を実施するので、韓国政府の環境政策の一環であるともいえる。例えば山林庁はこの法に基づき「白頭大幹保護地域の指定」を行うなどの政策を実施することになる。

この法律の条文を見ると、第1条に「この法は白頭大幹の保護に必要な事項を規定し、無分別な開発行為による破壊を防止することで、国土を健全に保存して快適な自然環境を造成することを目的にする」とあり、ここで白頭大幹は自然環境保全の対象であるように思われる。

また第2条では、特殊な用語の定義が述べら

れる。白頭大幹については「白頭山からはじまり、金剛山、雪岳山、太白山、小白山を経て、智異山につながる大きな山^{サン}チュルギ（山の連なり）を言う」と規定している。さらに1項の2では、「正脈」についても規定される。「正脈」は、「白頭大幹から分岐し、主要河川の分水界を成す、大統領令で定める山の連なりを言う」としている。「正脈」は図9に示したような、『山経表』に示された白頭大幹、長白正幹に連なる、朝鮮半島の地勢を形づくる13系統の山々の連なりであり、背景には「気」概念に基づく「脈」の論理がある語である。現代の法律に伝統的な「脈」概念に関わる規定が掲載されている点で画期的であるとも言えるだろう。なお、この法律に関連する「白頭大幹の保護に関する法律施行令」の第2条には、これら正脈のうち、主要な9系統が「大統領令に示される山の連なり」として規定される。

なお、このような記述に「風水」やそれに関連する「気」「吉地」等の用語は直接には登場せず、この法律に基づいて「気」の存在や風水の立地占定術を肯定するものではない。しかしながら第3条2項「白頭大幹の保護・管理の基本原則」を見ると、その2項の3には「やむを得ず白頭大幹を利用して毀損が発生した場合、最大限復旧・復元するよう努力しなければならない」とあり、2項の4には、「白頭大幹は正脈など他の山の連なりとの連結性が維持・増進できるよう、保全・管理しなければならない」と記される。

この記述は、山の連なり（稜線・尾根線に該当）が気の流れる「脈」であることに淵源があると推測される。「脈」の流れる山の連なりを開削するなどして、道路等を作って断ってしまう（断脈）と、気が流れなくなり良くないことを招くとされ、繋げておくことが重要である。山の連なりを「毀損したら復元すること」や「連結性の維持」は、そのような意味合いを持って

いるものと思われる。このように基本原則の記載を見ると、法律に「脈」の感覚が入り、活かされていることが理解できる。

この法律では、他にも国家と地方自治体が立案する「白頭大幹保護の基本計画」に関する規定、白頭大幹の毀損行為への罰則、地域住民への支援事業、保護地域の指定、土地の買収などについて触れられる。中でも第6条の「白頭大幹保護地域の指定」は、環境部と山林庁の協議を経て行われるものとされているが、いわば保護対象となる区域のゾーニングを行うということである。これは、白頭大幹は伝統的な概念であるために、現代の地図上に表現できる明確な領域は示すことができないからだろう。本来どこまでが「白頭大幹」にあたるのかは曖昧であり、伝統的な地理認識を現代の法律に落とし込む際の、ある種のギャップが表れたものとも考えられる。

おそらくはこの後、「白頭大幹」は、研究者だけが知る用語から、次第に一般に用いられる語になって来ているように思われる。例えば韓国における有数の山岳地帯にあり、白頭大幹も通過する江原道の広報サイトには「白頭大幹！その名を聞いただけでも私たちは白頭山を思い浮かべ、豊かな精気と威容を感じ、自然と気分がよくなる。白頭大幹という言葉聞き慣れない人でさえもそう感じるのは、昔から韓国民族の精神世界の内面に綿々と流れる、白頭山に対する独特で共通の情緒があるからであろう」とあり、半島の聖なる山である白頭山からのつながりのイメージや「民族の精神世界」との関連性が述べられる。さらに江原道の広報サイトには、白頭大幹上に「白頭大幹標示石」を設けており、今後も増設されることが示されている。

この地域は国立公園にもなっており、自然を楽しむ観光の盛んな地域でもあり、2013年から「白頭大幹峡谷列車 V-train」と呼ばれる韓国初のトロック列車が運行されている。列車の

運行をしている Korail のサイトでは、白頭大幹附近の峡谷を走る自然景観を楽しむための列車として説明されるが、ここでは恐らく白頭大幹は、山岳や豊かな自然景観のイメージの象徴として用いられている。一方で、韓国の飲食店チェーンにも「白頭大幹」という店名をつけている例が確認されるが、韓国料理を提供する居酒屋に該当する業態である。ここからは、白頭大幹という語について、やや大まかな「韓国固有の伝統」というようなイメージがあることが予想される。

4. まとめ：「民族の地理」・「もう一つの地理」

本稿では、白頭山から智異山に至る山の連なりを示す「白頭大幹」概念と、それに代表される「脈」の論理、またその現代的評価について検討した。その際に、まず「気」の流れる「脈」の表れとして山の連なりをとらえようとする形勢学派の風水地理思想の論理と、それに基づいて朝鮮半島の山々をとらえる『山経表』の内容、またそこで示された「白頭大幹」概念について確認した。その上で、現代韓国における「白頭大幹」や「脈」を中心とした地理認識への評価について探った。

「白頭大幹」のような感覚は、東アジアに広まった風水地理思想の形勢学派の「場所選び」の手法の中で中心をなす、山々をつなぐ「気」の流れる「脈」ととらえる考え方と深く関係を持つ。そしてそのような考え方で国土や地形環境を把握しようとする地理認識が朝鮮時代には見られ、著名な古地図や地理書などにも表れていた。

1980年代以降、韓国においては、風水地理思想に対する学術的研究が始まり、その中に含まれる、「脈」の論理で山を認識し、その良し悪しを判断しようとする考え方は、「看龍法」(崔昌祚、1997、(原著1984) など)等として触

れられるものの、当初はそれほど注目されていなかったように思われる。しかしながら『山経表』の復刻版の刊行を機に学術的に注目を浴びるようになった。この後さらに2003年の「白頭大幹の保護に関する法律」の制定・施行を通じて、環境保全と関わる語として「公式化」し、かつて迷信の範疇にあった風水地理思想と深く関連する地理認識が、ゆっくりと韓国社会に受容されつつあるように思われる。

現代韓国における、このような古い地理認識、あるいはそれに基づく国土認識への評価は、風水地理思想と深く関わる伝統的な地理思想の一端が積極的に受容されたとも言えるのではないだろうか。またこの際には、「固有の」伝統文化、いわば「民族の地理」としての側面と、伝統的知識を用いた環境認識、すなわち「もう一つの地理」という二つの評価軸が存在するように思われる。

「民族の地理」としての側面については、『山経表』の解題において朴龍洙（1990）が述べたように、朝鮮半島独自の地理認識方法であることもさることながら、日本支配時代に「名称が変えられた」山脈名を「取り戻す」という意味合いが大きいように感じられる。このように日本支配との関わりがあることで、さらなる肯定的評価が生じているとも言えるのかもしれない。

他方、そのような論点と重なるが、ここまで述べてきた「脈」による山々の認識は、それまで気づかずに使っていた地理認識とは異なる「もう一つの地理」であることも肯定的な評価を受けている原因である。なお管見の限り、このような山の連なりを中心とする方法での細かい国土認識は、中国を除くならば、世界的にほとんど見られないものではないだろうか。このような地理認識は、近年注目されている「伝統的知識」としての評価も可能であると考えられる。例えば朴秀鎮ほか（2014）は、風水地理思想

と関連する概念が韓国における地形把握や土地管理に用いられ、活用されてきたことを指摘している。

このような独特の「もう一つの地理」は、それが実質的に用いられ、しかも『太白山脈はない』における説明のように、現代の科学においても重要な「尾根線」や「集水圏」にも近い発想もある。このことで「白頭大幹」や「脈」の論理が民族意識だけに依拠した観念的な「民族の地理」にはなっていないように思われる。なお現在も「白頭大幹」に代表される、「脈」による山々の連なりの把握手法は、今後も地理教育や国土開発に向けた「標準山^{サン}チュルギ（山の連なり）」の設定などを通じ、活かされてゆく可能性がある。

本稿では、風水地理思想と関連する「白頭大幹」や「脈」の論理について、現代韓国社会における受容について検討してきたが、筆者が重要と考える文献や法律などに絞ってそのアウトラインを示すことに力点を置いたため、既刊の学術研究論文について詳細にレビューすることがかなわなかった。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 『山経表』、ブルンサン、1990
『扒里志（朝鮮八域誌）』成甲書房、1983
金料哲（2008）「韓国における近代地理学の黎明期—張志淵の『大韓新地誌』を中心に—」（千田稔編『アジアの時代の地理学』、古今書院）、pp.123-143
崔昌祚（三浦國雄監訳、金在浩・澁谷鎮明訳）（1997）：『韓国の風水思想』、人文書院
澁谷鎮明（2005）「朝鮮時代の地誌・地理書にあらわれる風水用語とその概念」、歴史地理学47-1、pp.64-79
チョ・ソクピル（1997）：『太白山脈はない』（韓文）、図書出版人と山
澁谷鎮明（2010）：「韓国における風水思想と「脈」の自然観—朝鮮時代邑志の山川条に見る「脈」の記載—」（神谷浩夫・轟博志編『現代韓国の地理学』、2010、古今書院）、pp.97-116
澁谷鎮明（2007）：「風水で国土をはかる一気と脈であ

- らわす朝鮮の古地図「大東輿地図」、(阪上孝・後藤武編『<はかる>科学、中公新書)、pp.124-145
- 朴秀鎮・崔元碩・李道元(2014):「風水の四神砂の地形発達史的解釈」(韓文)、文化歴史地理26-3、pp.1-18
- 朴龍洙(1990)「解題:山経表の一研究—原典、刊行時期等書誌学的検討を中心に—」(韓文)、(『山経表』、ブルンサン)、pp.5-50
- 李燦(1991)『韓国の古地図』(韓文)、汎友社
- 嶺南大学校博物館(1998)『韓国の古い地図』(韓文)
- 「国家法令情報センター」(<https://www.law.go.kr/>)
- 「韓国民族文化大百科事典」(<http://encykorea.aks.ac.kr/>)
- 「江原道」(日本語サイト)(http://jpn.gwd.go.kr/gw/jpn/sub03_06)
- 「Korail」(「白頭大幹峽谷列車」サイト)(http://www.letskorail.com/ebizprd/EbizPrdTrainOtrainIntro_vW_htm54120.do)